

かなであん



249-0002 神奈川県逗子市山の根1-7-24 Tel: 046-871-1863 Fax: 046-872-3485

© HP <http://kanadean.net>

絶望の中に耀く如来の慈悲

五濁悪時悪世界

濁悪邪見の衆生には
弥陀の名号あたえてぞ
恒沙の諸仏すすめたる

毎年、親鸞聖人の御命日（1月16日）に合わせてご本山で七昼夜の間勤められる「御正忌報恩講」のご満座で、御門主はこれのご和讃を引用し、本年度の御親教（お言葉）を述べられました。

* * *

五つの濁りとは、1番目は、時代の汚れ、つまり、天災、地変、戦争、紛争など。2番目は、思想、見解の汚れ。3番目は、煩惱の汚れ。4番目は心身の衰え。5番目は寿命が短くなることの5つですが、仏教の伝統的な世界観ではこのような表現になるでありません。その中を生き抜く道が「南無阿弥陀仏」です。と御門主は述べられました。

五濁りは当に今、私たちを取り巻く環境そのものです。罪悪のはびこる、環境の悪い、そういう世です。そしてそこに住んでいる私たちも「濁悪邪見」なのです。邪見とは、濁った邪な思いです。

自分の利益のためには、他を犠牲にすることをいとわない自己本位な、そういう思いの勝った生き方をしている人が多く、闘争が絶えない世の中です。

阿弥陀さまは、特にこのような末世の衆生のために「南無阿弥陀仏」のお念仏を与えてくださいましたが、それでもなお、それが信ずることの難しい私たちですから、数え切れないほどの縁ある仏さまが、尊い弥陀の名号を称えることを勧めておられるのだという和讃です。そんな仏さまのはたらきを「本当に私のためであった」と味わうことができたなら、誠に素晴らしいことだと、御門主はおっしゃいます。そして、人類の知恵には限界があり、予期せぬ出来事を避けることはできません。仏教、浄土真宗が担う課題の第一は、表面的な原因の追求ではなく、すでに起きてしまった結果をどう受けとめるかであり、その背景にある人間の姿そのものを見つめることです。結果は変えることはできませんから、その上に立って、今を生きなければなりません。と述べられ、結びには、私の願いは、宗門を国や自治体になぞらえて運営するのではなく、伝統的な檀家制度に閉じこもらず、変化の激しい社会の中で仏法を伝え、さまざまな悩みや問題を抱えた方々と共に歩むようになることです。それぞれの場で進められる

ことを願っています。と結ばれています。

* * *

誤解してはいけないのは、社会や時代に迎合して変化してほしいとおっしゃってるのではないということです。

親鸞聖人のお示し下さったお念仏のみ教えは、いつの世にも変わらない教えです。変わって来たのは、それを実践する形骸化したもので、これをもって宗教だとしているところが問題なのです。伝える側の責任が大きいことは言うまでもありませんが、お寺や宗教に不信や不満を口にする人たちが、一方では、お墓や法事や葬儀のような表に見えるものだけで宗教だと判断してはいないでしょうか。それが御門主が懸念されている、国や自治体になぞらえた運営です。お寺を法事や墓参りに便利りなだけの存在にしてしまっていないかということです。

仏壇やお墓を守る者がいない、先祖供養が続けられないなど、時代の抱える宗教に関する問題はすべて、親鸞聖人のお示し下さったお念仏のみ教えには解決されていたのです。

念仏成仏のみ教えは、どんな世にあってもすべての人を平等に救いとる教えです。その教えと共に生き抜くことが私たちの仏道の実践なのです。

合掌

ご案内
2月のご法座

日時
2月26日(火)
午前11時より

「真宗宗歌」
正信偈
法話
御文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとぎ

春来たりつつあり
万感といふ言葉

という句を見つけました。何故だか気に入って、こここの言葉がマイブームです。その万感の中身は、季節だったり、家族だったり、年齢だったり、体調だったり、人生だったり……、言葉にして言いたいものではなく、あくまで「感」です。

お念仏の仲間はお互いの心(感)を思いやりながら同じみ教えに生かされる御同行御同朋です。だから心地良いのだと思います。

まだまだ寒い日が続きます。どうぞ気をつけてお参り下さい。



仏教が生んだ日本語

無所得(むじょとく)

所得といえば、春闘という言葉が浮かんだのがすっかり影をひそめ、昨今では所得税の減税にまつわることが気になるご時世である。仏教では、我々が有るや無しに一喜一憂していることとは、似ても似つかない意味がある。

仏教でいう無所得の原語をたどると、古代インドのサンスクリット語のアンウパラプデイという言葉で、我々が考える具体的な金銭利益の有る無しを指すのではなく、実は仏教の大切な境地であり、教えを示す言葉である。ものに執着したりせず分別せず何ごとにもとらわれない自由な境地をいうのである。

話題は変わるが、明治の末に、東京浅草に無料宿泊所が産声をあげている。これが公共職業安定所の始まりである。地方から「東京で一旗」と夢見て、たくさんの人が流入し始めたころのことで、無料宿泊所は生まれるべくして生まれた慈善事業のひとつであると考えられる。

かの渋沢栄一のもとにいた安達憲忠の支援を受けて、真宗大谷派の僧侶・大原慧実が始めた事業である。

ここに注目すべき点は、止宿した人に仏教の無所得の大切さを説いたことであろう。のちに政府に受け継がれ、現在の公共職業安定所になった際に、この仏教の無所得の教えが受け継がれなかったことが残念でならない。仏教が高度な福祉思想であり、実践思想であることを、あらためて味わって頂きたい。

(大谷大学編)

編集後記

体罰やいじめが原因とされるとする自殺が事件として明るみに出る中、小学5年生男子が母校が廃校になることへの抗議として死を選んだという事件が起きた。■私はと言うと、さして勉強も出来ず、部活動に熱心だったわけでもなく、友が一番大切ということもなかったからか、「学校ごとき」で死にたいと思うなど考えもつかない。年を重ねて来れば、今の不安を味わない前に死んだ友を羨ましく思うことは度々あるが、自殺した子供たちには「何ともったいないことを」と言いたい。もったいないのは命というより、その命と共にあった人生だ。■人生経験が少ない若者にとって、目の前の生活だけが世界だと思える時もあるだろう。しかし、そんな時期は人生の中ではほんの短い些細なことであるということに思いがいく感性、もっというならば、そういう賢さを培う訓練を怠ってきたことへの猛反省をしなければ、この類の不幸を断つことは出来ないと思う。■私が卒業した過疎地の高校は数年前廃校になった。最後の年は女子生徒ひとりのためにだけ開校されていて美談とされ、みんなが横並びにセンチメンタルに受け取る中、私は、教育の真の目標のもとには、これは新たな一歩であると胸を張って閉じたい、それが私の母校愛だとのメッセージを贈った。■体罰問題が解決されていないままでは受験を中止すると決断した市長に対し、「子供の夢を絶つ」と、人生それしか選択肢がないかのように煽るが、こんな時大人が示すべきは、道は幾重にも開けているということ、凝り固まったこだわりを取り除くということを余儀なくしてくれたことがよかったと思える時がきくと来ると、励まし後押ししてやることではないだろうか。■輝かしいものでなければならぬと思ひ込まない限り、可能性というものは誰にもある。これは若者だけの特権ではなく、我々高齢者もいのちのある限り何らの可能性を持ち続ける。ああでなければならぬ。これがダメならお終いだという思考こそ、人間を拗ねさせ、陰気で、ひ弱で自己中の人間を作るのではないだろうか。

Norimaru